

建築学生ワークショップ宮島2022

architectural workshop MIYAJIMA

参加学生募集！

応募締切

5.20

Call for entry



建築の原初の聖地 — 厳島神社

6棟が国宝に、11棟3基が重要文化財に指定されている聖地に於いて

「厳島神社大鳥居・令和の大改修の年に。」
2022年 厳島神社 開催

厳島神社について

2022年夏、現代に受け継がれてきた、わが国を代表する神社・厳島神社境内にて、小さな建築空間を実現する建築学生ワークショップを開催します。593年神の島に社殿を創建したことに始まり、1168年平清盛により寝殿造りの大規模な社殿が整えられました。現在、御本社・客神社・回廊など6棟が国宝に、11棟3基が重要文化財に指定されています。高舞台(国宝:附指定)は日本三舞台の1つに数えられるほか、海上に立つ高さ16mの大鳥居(重要文化財)は日本三大鳥居の1つです。厳島神社の大鳥居は1875年の建立から145年が経過し、令和元年6月より損傷や老朽化の修理が開始されています。

開催

本開催は、公募した参加学生を5月20日に選出し、10つの班に分かれて、6月11日(土)に全国から広島に集まり、現地調査を開始します。厳島神社では、開催テーマとしての位置づけにもあるこの場所が持つ特有の力や意味を身体で感じ、その中から各々の班で発想の原点を見出していきます。さらに周辺地域の街歩きを繰り返し、いま現代に生き、東京で学んでいることへの意味をみずから問うていきます。

7月16日(土)の提案作品講評会では、国内外にて活躍をされる建築家・構造家の先生方を中心とした講評者の指導のもと、日本における貴重で特殊な環境における場所性に根づいた実作品をつくりあげる意味を問い直し、7月17日(日)の実施制作の打合せでは、地元の建築士や施工者、大工や技師、職人の方々に伝統的な工法を伝えていただく機会を得ながら、日本を代表する組織設計事務所の方々や多くのゼネコンに所属される技術者の皆様による実技指導をいただきます。

8月28日(日)、この参加学生たちが制作した小さな建築が8体、厳島神社境内に実現します。当日は、これらのプロセスを経て創出した建築空間を1日だけ、どなたでも体験していただけます。そして、建築・美術両分野を代表する評論家をはじめ、第一線で活躍をされている建築家や美術家の方々、世界の建築構造研究を担い教鞭を執られているストラクチャー・エンジニアによる講評者にお集まりいただき、公開プレゼンテーションを開催いたします。

学び

開催には、県内をはじめとした広島周辺の多くの方たちや、これまでの開催地の関係者の皆さま、そして全国から集まる建築に関わる関係者や一般参加者に向けた発表を行います。建築のプロセスに胸を躍らせる3ヶ月。参加学生たちがさまざまな歴史をもつ宮島の伝統を学び、この文化に位置づけた解釈を生み、厳島神社に存在し続ける建築様式に連なり、訪れた人たちの心を落ち着かせ、祈りを捧げるような空間体験と提案の発表に、どうぞご期待ください。



海上社殿



御本社



高舞台・平舞台



客神社



反橋



五重塔・千畳閣



西回廊・能舞台

Architectural Workshop MIYAJIMA 2022

開催場所 厳島神社境内（広島県）

厳島神社は、593年海浜に社殿を創建したことに始まり、1168年平清盛により寝殿造りの大規模な社殿が整えられた聖地です。



現地滞在スケジュール

6月11日(土) 宮島交流館
現地説明会・調査(日帰り)

7月16日(土) 宮島交流館
提案作品講評会(1泊2日)

17日(日) 宮島交流館
実施制作打ち合わせ(1泊2日)

8月23日(火) - 29日(月)
合宿にて原寸制作(6泊7日)

8月28日(日) 千畳間
公開プレゼンテーション

※参加申込の際に、全日程の予定を確保してからお申込みください。

7月02日(土) 午後
各班エスキース(東京・大阪会場)

開催期間

2022年8月23日(火) - 8月29日(月) 6泊7日

※合宿にて原寸制作
※8月28日(日)千畳間にて公開プレゼンテーション

参加費用

実費 (宿泊費、保険代、資料費等 ¥35,000 事前徴収制)

※現地までの交通費・食費は各自別途負担となります。
※開催地の有志の方々のご協力と、学生の参加費により運営をしています。

参加申込

ウェブサイトからお申込みください

※参加者募集期間 2021年9月13日(月)~2022年5月20日(金) 23:59(必着)
※参加対象者 建築および都市、環境、デザイン、芸術など、これに類する分野を学ぶ学生および院生
【参加学生】定員:60名程度(大学院生8名+参加学部生42名+運営サポーター10名) 8グループを予定
ただし、定員を超えた場合は、主催者による選考をおこないます。予めご了承ください。
【運営サポーター】定員:5~10名程度(参加・宿泊費無料 開催期間中) 開催期間中、合宿期間中の運営サポーターも募集いたします。(学部は問いません)
※交通費・食費 各自・自己負担

<https://ws.aaf.ac>

参加予定講師者

日本の文化を世界へ率いるの方々を中心として、建築・美術両分野を代表する評論家をはじめ、第一線で活躍をされている建築家や都市計画家、コミュニティデザイナー、構造研究を担い教鞭を執られているストラクチャー・エンジニアによる講評。また近畿二府四県の大学で教鞭を執られ、日本を代表されるプロフェッサー・アーキテクトの皆さまにご参加いただけます。

村上 徹 (建築家 広島工業大学名誉教授)	五十嵐太郎 (建築史家・建築批評家 東北大学教授)	平田 晃久 (建築家 京都大学教授)
谷尻 誠 (建築家・起業家 SUPPOSE DESIGN OFFICE 主宰)	倉方 俊輔 (建築史家 大阪公立大学教授)	平沼 孝啓 (建築家 平沼孝啓建築研究所 主宰)
前田 圭介 (建築家 近畿大学 教授)	稲山 正弘 (構造家 東京大学 教授)	藤本 壮介 (建築家 藤本壮介建築設計事務所 主宰)
石川 勝 (大阪・関西万博会場運営プロデューサー)	腰原 幹雄 (構造家 東京大学 教授)	安井 昇 (建築家 桜設計集団 代表)
太田 伸之 (日本ファッションウィーク推進機構・実行委員長)	櫻井 正幸 (旭ビルウォール 代表取締役社長)	安原 幹 (建築家 東京大学 准教授)
前田 浩智 (毎日新聞社 主宰)	佐藤 淳 (構造家 東京大学 准教授)	山崎 亮 (コミュニティデザイナー 関西学院大学 教授)
建島 哲 (美術評論家 多摩美術大学 学長)	芦澤 竜一 (建築家 滋賀県立大学 教授)	山代 悟 (建築家 芝浦工業大学 教授)
南條 史生 (美術評論家 森美術館 特別顧問)	長田 直之 (建築家 奈良女子大学 准教授)	吉村 靖孝 (建築家 早稲田大学 教授)

建築学生ワークショップとは

建築ワークショップは、建築や環境デザイン等の分野を専攻する大学生を対象にした、普段の大学生活では体験できないスケールで作品制作を行う地域滞在型のワークショップです。国内外にて活躍中の建築家を中心とした講師陣の指導のもと、開催地の歴史や地域環境を研究しながら、他大学生との交流の中でその場所における社会的な実作品をつくりあげる経験を目的としています。

“今、建築の、原初の聖地から” 伝えたいことを、空間として表現してください。

2022年夏、現代に受け継がれてきた、わが国を代表する神社・厳島神社神域にて、小さな建築空間を実現する建築学生ワークショップを開催します。厳島神社の大鳥居は1875年の建立から145年が経過し、令和元年6月より損傷や老朽化の修理が開始されています。伝統技術を含めた次の時代の建築を担う学生らが「令和の大改修の年」に、宮島に合宿にて建築の実現をいたします。将来を担う学生たちが今という時代に向き合い、この場所でできることに全力で取り組む。新たに建築空間の力を備えて「実際につくる」という取り組みは、大変貴重な試みです。学生たちはきっと、その若い感性によって新たな発見をし、未来を創造する提案をしてくれることでしょう。

【スケジュール】

5月12日(木) 参加説明会開催(東京大学) 谷尻誠
5月19日(木) 参加説明会開催(京都大学) 前田圭介
5月20日(金) 23:59 必着 参加者募集締切(参加者決定)
6月11日(土) 現地説明会・調査
7月2日(土) 各班エスキース(東京会場・大阪会場)
7月16日(土)~17日(日) 提案作品講評会と実施制作打合せ
16日(土) 提案作品講評会
17日(日) 実施制作打合せ
7月18日(月)~8月22日(月) 各班・提案作品の制作
8月23日(火)~8月29日(月) 合宿にて原寸制作ファイナル
23日(火) 現地集合・資材搬入・制作段取り
28日(日) 公開プレゼンテーション
29日(月) 撤去・清掃・解散



厳島神社全景



御本社祓殿

【制作内容】

“今、建築の、原初の、聖地から” ~島の未来のために建築ができること
“唯一無二の環境を守るために、あなたの提案を実現化してください”

- ・フォリー(原寸模型)を地域産材(自然素材:木材、和紙、土、石など)の材料で制作
- ・リユース、リサイクル制作を前提とし、ゴミを出さない手法や構法、利用方法を探る

Architectural Workshop MIYAJIMA 2022

開催記念 説明会 講演会

全国の建築学生が合宿にて制作を行う「建築学生ワークショップ」は2022年、8/23(火) - 29(月)に厳島神社境内にて開催します。このワークショップの参加募集の説明会と開催を記念して、活躍される建築家に自身の学生時代の体験を通して、現在の研究や取り組みにどう影響しているのかをレクチャーいただきます。ワークショップへの参加を予定していない方でも、どうぞお気軽にご参加ください。

東京会場

東京大学 (弥生キャンパス) 農学部 弥生講堂アネックス

東京メトロ南北線「東大前駅」徒歩3分
東京メトロ丸の内線・大江戸線「本郷三丁目駅」徒歩10分

5月12日|木|18:30 - 20:00 (18:00 開場)

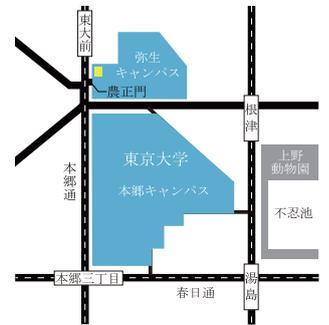
入場無料 | 定員：先着 100名 | 要申込 ※当日のご参加も若干名様まで可能です。
※開催日程・場所は予告なく変更する可能性があります。
ウェブサイトを再度ご確認ください。



基調講演 谷尻誠 (建築家・起業家)

1974年 広島県生まれ。2000年、建築設計事務所 SUPPOSE DESIGN OFFICE 設立。2014年より吉田愛と共同主宰。広島・東京の2カ所を拠点とし、インテリアから住宅、複合施設まで国内外合わせ多数のプロジェクトを手がける傍ら、穴吹デザイン専門学校特任講師、広島女学院大学客員教授、大阪芸術大学准教授なども勤める。近年オープンの「BIRD BATH&KIOSK」の他、「社食堂」や「絶景不動産」「21世紀工務店」「tecture」「CAMP.TECTS」「社外取締役」「toha」をはじめとする多分野で開業、活動の幅も広がっている。

新型コロナウイルス感染拡大防止の為
本開催を中止いたします。



京都会場

京都大学 (吉田キャンパス) 百周年時計台記念館 国際交流ホールIII

京阪本線「出町柳駅」徒歩10分
京都市営バス「京大正門前」または「百万遍」下車 徒歩10分

5月19日|木|18:30 - 20:00 (18:00 開場)

入場無料 | 定員：先着 100名 | 要申込 ※当日のご参加も若干名様まで可能です。
※開催日程・場所は予告なく変更する可能性があります。
ウェブサイトを再度ご確認ください。



基調講演 前田圭介 (建築家)

1974年 広島県福山市生まれ。1998年 国士舘大学工学部建築学科卒業。2003年 UID 設立。2022年より近畿大学教授。故郷である「広島県福山市」を拠点に国内外でインターローカルな設計活動を行う。主な受賞歴は「アトリエ・ビスクドール」で ARCASIA 建築賞ゴールドメダル、第24回 JIA 新人賞、日本建築学会作品選奨。「Peanuts」で日事連建築賞国土交通大臣賞、こども環境学会賞デザイン賞。「群峰の森/COSMIC」で AR House 2016 Winner。「とおり町 Street garden」でグッドデザイン 2017 金賞など。



2010 奈良・平城宮跡



2011 滋賀・竹生島



2015 和歌山・高野山



2016 奈良・明日香村



2017 滋賀・比叡山



2018 三重・伊勢神宮



2019 島根・出雲大社



2020 奈良・東大寺



2021 東京・明治神宮

主催

特別協賛

© AAF 知性あふれるレクリエーションを。 Art & Architect Festa
NPO/AAF Art&Architect Festa 特定非営利活動法人アートアンドアーキテクトフェスタ ウェブ www.aaf.ac Eメール info@saifac

厳島神社

AGB
旭ビルウォール株式会社

座談会 | ” 厳島神社大鳥居・令和の大改修の年に ”

建築学生ワークショップ宮島 2022

野坂元明(厳島神社宮司) × 中村靖富満(やまだ屋 代表取締役社長)

× 佐々木雄三(広島県廿日市市議会 | 議長) × 藤井幹也(厳島神社権禰宜) × 梅林保雄(宮島町商工会 | 会長)

× 腰原幹雄(構造家 | 東京大学生産技術研究所 教授) × 櫻井正幸(エンジニア | 旭ビルウォール 代表取締役 社長)

× 佐藤淳(構造家 | 東京大学 准教授) × 平沼孝啓(建築家 | 平沼孝啓建築研究所 主宰)



座談会の様子 (厳島神社 海上社殿 朝座屋にて)

——— 全国の大学生が参加するこの建築学生ワークショップは、毎年、場所を移しながら開催してきました。歴史と場所の特性をはっきりと持つ開催地と、周辺的生活文化を合わせて調査することにより、街や地域との関わりや建築を保全していく造り方の技に触れ、制作を含めた実学として地域滞在を行い、神聖な場所の静肅な空間からコンテクストを見出し、現場で建築の解き方を探るきっかけを経験していきます。現在、厳島神社の大鳥居は1875年の建立から145年が経過し、令和元年6月より損傷や老朽化の修理が開始されています。社殿は現在、御本社・客神社・回廊など6棟が国宝に、11棟3基が重要文化財に指定されています。平舞台(国宝:附指定)は日本三舞台の1つに数えられるほか、海上に立つ高さ16mの大鳥居(重要文化財)は日本三大鳥居の1つとなります。近現代における主要都市のまちづくりに欠かせない最も貴重となる「聖地」という歴史環境を現代にも残す清らかな場に身を置き、全国から集まる建築学生らがこの伝統的な構法に触れ、この場に位置づけた建築の解釈を生み出します。このワークショップでは場所の特性を用いるため、大きく分けて「歴史」「場所性(地形)」「近代の問題」の観点を提案に求めます。現代に受け継がれてきた厳島神社で、空間性へのテーマや実現へのコンセプトのヒントとなる話題を、どうか併せてお聞かせください。

本日は開催地として多大なご尽力をくださいます厳島神社にて、全国の参加学生に向けてお導きをくださる野坂宮司をはじめ、これまでこの開催実現へのご協力をくださっている宮島の皆さまにもご参加をいただきながら、この建築ワークショップを初年度から見守り続けてくださる、東京大学の腰原先生、佐藤先生、そして毎年、私たちと併走したサポートをくださいます、旭ビルウォールの櫻井社長と、オーガナイザーの役割を担い続けてくださいます、建築家の平沼先生と共に、「大鳥居・令和の大改修」完遂の年に合わせた宮島開催についてお伺いいたします。皆さま本日はどうぞよろしくお願いたします。

平沼: 593年に創建され1168年にこの大規模な社殿が整えられたと伝えられています。現代にまで続く聖地となり今もこれだけの方たちに受け継がれてきた思想と、宮島と周辺に暮らす方たちの生活文化やこの場所が選ばれた背景をお聞かせいただけませんかでしょうか。

野坂: 伝承によると、海で釣りをしていた土地の者に、御祭神がどこか良い所がないかという問いかけをされたそうです。そして、カラスの先導により島を見ながら廻られたのですが、その時点でこの島はもう選ばれていたと考えられます。この島自体が、神様のような存在なのですね。私がこういうことを言うのは変かもしれませんが、たまたまこの島が選ばれて、今のこの状態があるのだということかもしれません。ですから、仮にもう少し西に阿多田島がありますが、そこを神様が選ばれて神社が造られていたら、この島はただの普通の島だったと思います。

平沼: なるほど。当時の島の住民の生活文化はどのようなものだったのでしょうか? この大規模な社殿が造られた1160年頃にはもう町があったのでしょうか?

野坂: 当時は一応、人は住んでないことになっています。入植はまだですね。社寺があるところには門前町が栄えていきます。だから先に神社があって、町が出来たのではないかと思います。

佐々木: 観光課が1964年から統計を取られています。来島者は当初200万人ぐらいだったのですが、今年が多分過去最低になりそうです。平均しますと240-250万人程度、増加の追い風になったのは大河ドラマ、「新平家物語」の時に、270万人で、「毛利元就」も312万人くらい。それで過去最大の昨年は465万人ですね。1995年の阪神淡路大震災で一旦減少しましたが、次の年の1996年には宮島が世界文化遺産に登録され、翌年の1997年に毛利元就の大河ドラマが放映され一気に増えて、それからずっと順調に推移してきました。

腰原：明治の頃は、伊勢で作っている厳島錦帯橋マップというのがあって、やはり西に行くくと厳島というイメージがあったみたいです。

野坂：参詣地として、そういう捉え方はされていましたが、神社にも昔は厳しい時がありまして、私の祖父の頃は運営がものすごく大変だったということをよく聞かされました。特に今のように交通網も発達していない頃の話です。

佐々木：昭和 56 年か 57 年くらいに、修学旅行先に宮島と平和公園が選ばれるようになりお越しになる方が増えたように思います。

平沼：しかし 50 万人を想定していたものが、460 万人になると許容出来ないのではないかと思います。

野坂：はっきり言って、去年はいわゆるオーバーツーリズム状態になりかけていたんだと思います。それは町の方々をご存知だと思います。

中村：公共施設を中心に、オーバーフローでした。トイレに行列ができたり、棧橋で船舶を待つお客様の列が建物の外までつながったこともありました。神社さんも、参拝されるお客様を整理されるのが随分ご苦労されたと思います。江戸時代から徐々に厳島神社さんへの参拝のお客様が多くなられて、旅館や、飲食・遊興の施設などが徐々に出来てきました。明治に入ってから船舶の会社が出来て便利になり、またお客さんが増えました。ちょうど日清戦争日露戦争の時に、全国から広島に兵隊さんが集められ、海軍は呉から、陸軍は宇品から大陸に向けて出兵していきました。その時に戦勝祈願に厳島神社にお越しになられ、また戻ってこれたらお礼参りに来られるということに伴って参道のお土産物屋なども徐々に増えてきたということのようです。

佐藤：江戸時代から明治初期頃の行き来の仕方は渡し舟だったんですか？歩いて行けるような棧橋はなかったということですか？

佐々木：今の広島経済大学セミナーハウス「成風館」の前に大きな棧橋の名残があります。

中村：明治 33 年宮島渡航会社が設立されました。

佐々木：それまでは渡し船ですね。

中村：渡し船で広島の旦那衆が厳島詣をされ、商売繁盛や家内安全を祈願された後、島の中で精進落としと称していろいろな遊興にふ



野坂元明
(厳島神社 宮司)



佐々木雄三
(広島県廿日市市議会 議長)



平沼孝啓
(建築家 | 平沼孝啓建築研究所主宰)

けられた、そういう地域の成り立ちがあります。

腰原：神社としての船の入り口はどこにあったのでしょうか？

佐々木：おそらく大元神社のあたりですね。

腰原：儀式として偉い人が地位のある方々が来る時のルートはあったんでしょうか？

藤井：平清盛公の時代に、高倉上皇がいらっしゃっているのですが、その時は有之浦、今の石鳥居の向こうにまず船を着けられています。そこから社殿の西側に建てられた御所へ船で入られました。渚に廊を造って、船から直接その御所に入れるような形だったようです。そこから神社の北の浜を通して、現在の入口の方から建物に入れ、客神社、御本社の順にお参りをされたという記録が残っております。

佐藤：海や気象とお社に何か関係があったりしますか？海の生態系や、森の植物などとの関係の中で、普段なさっている工夫みたいなものはありますでしょうか？

腰原：満ち引きに対して、どう接しておられるのかとか。

野坂：自然の流れに任せています (笑)。現実的なお話をしますと、潮に冠水してしまうと参拝者の方の迎え入れができなくなるので、その間はしばらくお待ちいただいています。

佐藤：浸水した後は、何かされるのですか？

野坂：掃除します (笑)。

平沼：でも台風が直撃したら、絶対に被害を受けるような社殿ですよね？ですから、修繕を前提に作られていたりするのでしょうか？床板を見たら、やはり隙間を開けていますものね。

野坂：板に隙間を開けているのは、修繕を前提としながらも、被害を軽減させるための構造だと思います。潮が床より上がった際に、水圧を軽減させ、かつ水を抜きやすくするためのものです。

佐藤：しかし、濡れたり乾いたりを繰り返していると、ずっと浸っているよりも腐りやすいですね。何か、こう対策を取られているかなと思ったのですが。

野坂：潮の浸水というよりは、キクイムシやフナクイムシの食害が多いのでその対策をしています。

佐藤：薬剤を含浸させたりということですか。

野坂：はい。今は合法的なものを注入して使っています。

腰原：災害に対して人間の知恵で対策するのが今の建築です。しかしこの立地条件になってくると、受け入れざるを得ない。それが教えなのかもしれないですが、そういう価値観というのはあるのでしょうか。

野坂：立地の環境は、受け入れざるを得ません。なされるがままですよ。

全員：ははは（笑）。

腰原：東日本大震災で考えると防波堤を作って、波が来ないようにするというのが現在の価値観です。けれどこのまま、これだけ台風被害を受けようが、こうあるべきだということで維持されていますよね。

野坂：それはやはり、国宝の指定、いわゆる指定建造物だからではないでしょうか。例えば、御本殿の周りに玉垣という塀がありますが、あれは控えの柱がただ土に入っているだけです。だから、猛烈な台風とかで抜けて傾く。修理して控え貫を入れたら抜けないのに、現状変更は認められません。

腰原：その辺りは僕たちの悩みでもあるんです。昔の人たちはどういう価値観で、建物をつくっているのか。もちろん安全にする仕組みを作りましょうということだったら、地面を掘って、潮に合わせて上下するようなシステムを作ればいいのかもありませんが、やはり根底にある、こうあるべきかどうか、こうありたいという考え方に基いて気楽に、壊れたら壊れたで仕方ない、きちんと直そうということを繰り返すしかないわけですね。

平沼：宿命的というか、儚さをここに体験しに来ている気がします。

藤井：神道、神社というのは自然の営みの中にある信仰、日本人の伝統的な価値観の中にあるものですから、その自然環境に添って建物が造られてきたのだと思います。歴史を見ると例えば川の流れを変えてみたり、土石流の砂を使って松原や森を造成したり、建物の構造は大きく変えられることがありませんでしたが、社殿周辺の環境を変える防災としての営みというのはありました。ただ原則として、



中村靖富満
(やまだ屋 代表取締役社長)



櫻井正幸
(旭ビルウォール 代表取締役社長)



藤井幹也
(厳島神社 権禰宜)



佐藤淳
(構道家 | 東京大学准教授)

神域としての尊厳を保ち、自然と調和するように配慮した上での話だと思います。

平沼：大きな台風や高潮も含めて、太平洋戦争もあったと思いますが、いろいろな時代を超えてきて社殿がなくなったことはないんですか？

藤井：火災で二度全焼し、鎌倉時代に再建されたのが今の社殿の基です。社殿がなくなったことはありません。常に修復、再建を行いながら現在まで維持されてきました。

佐藤：先程の斜め柱のところ以外に、頻りに壊れるところがありますか？

野坂：どうしても弱い部分というのが何箇所もあります。我々としては、壊れるというよりは傷むという考え方です。とにかく私たちの最大の使命は、今の社殿を同じ状態のまま後世に護り伝えるということですから、傷んだら常に修繕して行かなければなりません。

佐藤：鳥居の基礎はたくさんの松杭が刺さっていたとか、その中が空洞だったという話をお聞きしたのですが、木材が傷むことに対して工夫があったのかなあという気がしたのですが、壊れるのをそんなに補強せずに使っていくような維持の仕方をされているように聞こえました。

野坂：単純に財政的な問題だと思います。

平沼：二度焼失した時はどのように復興されたのですか？

藤井：当時の鎌倉幕府から、全て再建しなさいということでしたが、その期間が伸びてしまって、早く完了するよう再度の命令が出されて、ようやく造り終えられました。

櫻井：床に使っている木は何の木ですか？

野坂：今は松です。

藤井：基本的には地元にある木材を使うべきなのですが、時代と共にそれでは賄えなくなって、色々な所から集められています。

櫻井：昔台風の後には床板が取れたと聞きましたが、あえて浸水させるということでしょうか。

腰原：一応浮力がかからないように隙間が空いていて、浸水させてしまうということです。

佐藤：学生たちが8チームに分かれて構築物を考える時に、材料をいつも探して回るのでありますが、こちらで使っている材料を教えてくださいませんか？例えば、石垣だとか、海の堤防というか、構築物を積む時に積む石はこの何石ですか？花崗岩ですかね。

佐々木：石なら大元神社のまわりにも、海の中でもありますね。

佐藤：直接的な関係としては、筏のようなものを浮かべてその上に学生たちが構築物をつくるという時に、筏を係留しておくために、石の重りを沈めておければ、係留しておけるたり、重石に使うというようなことも考えられるかなと思うんです。

腰原：そもそも境内という概念はどこにあるのかなど不思議に思っているのですが。

野坂：いわゆるお金をお預かりするようになった際に、入口は定めなければならなくなりましたが、神社の歴史の中で言うと最近のことです。それ以前は、極端な話どこから入られても、一切咎めないということでした。

腰原：本当はどこから入ると良いんでしょうか？子どもの時はどこから入るのが一番楽しかったですか？

野坂：子どもの時は海からでもどこからでも入りました(笑)。しかし、島の人には良くても島外から来た人は駄目というのは、今は通用しないですよ。ですからみんな平等に、同じように入ってくださいということにしています。そういう風にせざるを得ないと思います。

腰原：地域の方々は、神社をどのように見ていらっしゃるのでしょうか？

佐々木：やはり、島民全員が厳島神社の氏子ですから、昔から神社が栄えることによって私たちも栄えるという観念を持っています。

佐藤：そもそも、どうして大鳥居が海の中に建てられたんですか？

野坂：もともとはあそこが参道で、船で参拝するのに・・・

佐々木：くぐって神社の西側にある洲などに船を着けていました。



梅林保雄
(宮島町商工会 | 会長)



腰原幹雄
(構造家 | 東京大学生産技術研究所教授)

中村：もともと島自体が神様なので、この神社も島の上ではなくて砂浜の上に建てられています。

野坂：明治神宮に行かれる時も2箇所か3箇所参入口がありますよね。それぞれ鳥居が立っていませんか？それと同じ解釈だと思います。動線ですね。動線を導くにあたってここから来てほしいと言う意味です。ここから先は心静かにと意味で鳥居を間際ではなくて離れたところに作ったという解釈です。

中村：島は神様なので、昔は農耕も禁じられていました。神様の体に鎌をうつことになってしまいますので。戦後に食料不足になって、島の両端に畑とかを作って農業しはじめたのですよね。

平沼：全国の学生たちが、建築を学び、造営や、修繕も修復も含めて繰り返している場所にやっぱり興味をもっています。若い人たちが厳島神社のようなところに敬意を持って取り組んでくれると後に継いでいけるのではないかという思いで開催しています。

櫻井：今ちょうど、大鳥居の修復をされていますが、資料には過去にこんな修繕をして、実はそれが失敗だったからやり直したとかたくさん書いてあり、挑戦と失敗の歴史を結構持っているのだなと思ったのです。ここはやはり自然環境がすごいから戦わざるを得なくて、打たれたら次はもう一回同じ打たれ方はしないようにしてきたのかなと思いました。あの鳥居の修復の歴史を少し見るだけでも僕は面白いと思いました。

腰原：大鳥居よりも床下を見たら、試行錯誤の形がありますね。

櫻井：ちょっと潜らせていただいたら？潮が引いている時は大丈夫ですよ？そういうのを見るとすごく勉強になるんです。東大寺の二月堂に行った時に、お水取りで、昔燃やしたことがあると聞きました、火事で燃えたそうです。ちょうど木目の間に挟まってくすぶっていた火が夜中になって急に燃え出した。火は動いていないといけな、止まった火が一番危険だという教えをずっとされているらしいんです。ここは水との戦いで、火の後に水だからすごく興味があります。

平沼：でも、僕たち立派な寺社に行きたいわけではなくて、建築を学んでいますから、建築の原初の場所を回っているようなつもりです。一緒になって開催をさせていただけるということで、本当に楽しみにしています。

櫻井：今年はコロナという100年に1回のこと、一瞬目の前が真っ暗になりました。でも新しい問題に出くわすと人間はすぐ工夫するものです。この場所で鳥居や基礎をみんなで見てみると、建築をやっている人にとってたくさん新しい発見があり勉強になりました。

(令和2年11月3日 厳島神社 海上社殿 朝座屋にて)

——— 大変貴重なお話をいただき、本日はどうもありがとうございました。将来、この場所で開催した意義に継いでいこうな、提案作品を募りたいと思います。

聞き手：宮本勇哉 山本康揮 (AAF | 建築学生ワークショップ2022運営責任者)